

紅い花

(十一) 葛藤

琉 紅

(十一) 葛藤

数日後。

中山連合軍は、すでに今帰仁城目前に集結していた。

国頭、名護城の兵は、賢龍が城に戻った途端、火矢で最初の城壁に対して攻撃を開始した。王子もろとも戦いに巻き込む為だ。

王のハンアンチは、『今帰仁城はこれまでの戦で、一度も敵に開城したことは無い、難攻不落だ』と言ひ放ち、戦いの意思を示した。毒が抜けて体力を回復しつつある美久は、そこから遠く離れた首里城に居る。

正殿の奥には、尚思紹王を中心、巳志、各城の王、将兵、軍師等で軍事会議を開いていた。

美久は北殿の窓から見える風景を、ただひたすら見つめていた。彼女の心は遠く北の山々、賢龍へと向けられている。

美久はプレゼントされた紅色の花のかんざしを取り出して、ゆっくりと自分の髪に挿した。

六百人程の名護、羽地、国頭の軍勢が今帰仁城を攻撃していた。

城壁での攻防は続いた。敵は、かつて北部を統治する仲間

であった。兵士等は、友人同士、隣人仲間を殺し合っているのも同然だった。

ハンアンチ王は中山からの軍勢が押し寄せる情報を元に、籠城の準備をすでに整えていた。

城壁内で戦っていた賢龍の右の膝に矢がかすめた。海蛇に噛まれた傷近くだ。

「うつ」

鮮血が飛び散り、賢龍は痛みに声を発した。

同時に首里城の美久の鼓動も、激しく打ち出した。

両手が震え、頭痛が走る。洞窟でのヌルの修行以来、彼女の意識は遙か遠くの何かと繋がることが可能になっていた。美久の愛する者を思う心は、確実に賢龍をとらえて離さなかつた。

美久は本殿の奥に座している将兵らに駆け寄つた。

「なぜ、北山に攻め入るのですか……」

将兵の一人が美久を捕えた。

「わしらに歯向かうからじや、琉球の天下泰平のためじや」と、将兵や軍師らの後方、奥の玉座に座つていた尚巴志は静かに答えた。

「それは嘘です。私には見えます、尚巴志殿の欲が。明貿易を自分ひとりでやりたいと。皆それぞれに交易をして、上手

くやっています。統一して、どうするのですか?」

と、美久は尚巴志に面と向かって反対の意をぶつけた。
「美久、静かに。言葉が過ぎます。あなたは中山の軍師なのですよ」

大君は尚巴志の顔色を伺いながら、美久の側に詰め寄った。
「ええ。では、軍師の一人として申し上げます。北山攻撃は止めて下さい。まだ話し合いの時間をかけていないじゃないですか」

青江は花のかんざしを指差し、馬鹿にした口調で、

「はは、あの王子に心を奪われたのね。人前で堂々と抱きついて、汚らわしい。所詮、北山は私たちの前にひれ伏すわ。王子もやがてここに連れてこられるわよ。それから好きなようになります」

「あなただけは、絶対に許さないわ」

美久にとつて生まれて初めて、感情が高ぶり真っ赤な鬼のような顔で、青江をにらみ返した。

将兵の一人は、美久に退出を促す。
しかし、それでも頑として動かないでの、とうとう兵士二人が美久を引きずり出した。

尚巴志は大君に怒りの目を向ける。

「なぜ、あの軍師を処刑せんのか、もはや我々に対する忠誠心は見られんではないか。北山が連れてきたと聞いた。密偵ではないか。これ以上、許さん」

「尚巴志殿、あの子が、次の琉球を背負うヌルです。やがて優秀な軍師、祭司となるでしょう。殺すには惜しい人材です。この戦が終われば、我が琉球のために活躍するはずです……お許しを」

尚巴志は珍しく長考し、決断した。

「この戦の時期は合わぬか。なら軍師は外す。城から連れ出し監禁しろ」

浦添のヌル養成所に、美久は急遽引き戻された。

大君と青江が付き添い、嘗て紹介された大広間に連れてこられた。

「ああ、騙された。私がした城主を無血で従わせる策。その兵が全部集められ中山大連合軍になり、北山を今、攻め滅ぼそうとしている」

「よくやったのじや。中山の軍は最強となつた。それを尚巴志殿も認めておる。それであの場で、あのような事を喋つても、殺されずに済んだのじや」

「あああ、嫌よ。イヤ！」

美久は崩れ落ちるように座り込んだ。

「何故だ、あの試練に耐え抜いたではないか。一時の感情に流されることはなかろう。学べ、これが戦じや。我々中山が琉球を一つにし、安定した平和な島とするのじや。楽しみではないか？」

青江の口元に笑みが、

「下手に、男に気を狂わされたのよ。男色に惑わされたヌルは、危険で使えないわ。本来なら、直ぐにでも牢獄に入れるべき。北山に行つたり来たりで、密偵としても働いているんでしよう、大君殿、今こそ処分を」

と、青江は罵った。

しかしそんな言葉も美久の心には何の影響も及ぼさなかつた。

彼女の気持ちは窓から見える北の方向に向いたままだ。

今帰仁城の前で足の痛みを抑え、馬に乗つたまま名護兵と戦う賢龍の姿が一瞬、目に浮かんでは消えていた。

「青江の言う通り、本当にヌル失格ね。賢龍様のお姿が見えて……声が耳に届くのです」

「縄を持て……ふう」

と、大君これまでになく、大きく息を吐いた。

青江は、美久を柱に縄でくくり付けた。

大君は、美久の頸を持ち上げ、

「美久よ、どうしたのじや。お前の力には目をかけておるのに」

大君を見るが、顔を左右に振り、その手を振り払う。

体を揺らし始め、受ける感覚にもがき苦しんだ。

北山の戦の情景が、美久の意識に入り込んでいるのである。

賢龍の率いる騎兵隊が、城壁近くで苦戦している。前方からさらなる軍勢が押し寄せ、一本の矢が彼の右腕をかすめ飛んで、地面に刺さつた。

「いやーっ」

美久も同時に自分の右腕を見た。

今度は鼓動だけではなく、同じ痛みを感じたのだ。

大君の目には、彼女は口から泡を吹き出し、今にも気が狂いかけているように見える。

「頭が混乱し、幻覚を見始めたのか」

「全ての神様、彼を救ってください」

美久は振るえる瞼を閉じてそう言つた。

「哀れな、これがわが身を受け継ぐ軍師となろうとした者の

言葉か、物事を見通せるはずが、本気で神にすがろうとするか。美久よ、何故弱くなつた……。私は北山攻略の為に向かわねば……お前と共に策を練たかつたのに、惜しいものよ」

「いや、やめて、あの城を攻撃しないで」

美久は目を見開き、嘆願する表情を大君に向けた。

青江の軽蔑した口調が返される。

「気持ちちは、北山王子の女になつてゐるのよ。それで私に勝つたつもりなの。滅び行く城の王妃よ。そこで王子が尚巴志

殿の前でひれ伏すのを見ているがいいわ……。何、その花は、いやらしいわ」

と、青江は美久の髪に差してあるかんざしに触れようとする。

「やめて、それに少しでも触れたら、絶対に許さない。この場で、呪い殺すわ！」

「もうよい！」

大君は青江を制した。

青江は高笑いをしながら、手を引っ込めた。

美久の見つめる北の方向の窓板を勢いよく閉めた。

「本部平原も唯一、我々に従うことを拒否した。同じだ。自分の考えに縛られた者は滅びる」

大君はそう言い残し、青江と共に去つていった。

幾時が過ぎた。

もがき苦しむ美久に、戸板が開き西日が漏れて差し込んできた。噂を聞いて姉が駆けつけてきたのだ。

姉は美久を見るなり掛け寄り両手を掴み、顔を覗き込む。

「美久」

ゆっくりと顔が持ち上がる。

「お母さん、駄目。どうしても自分を抑えきれない。もう、夕方なの？」それとも朝？」

美久の頬には止めどもなく流れた涙の跡、姉はそれを拭き取つた。

「しっかりしてよ。私よ。お母さんは久高島にいるでしよう。大丈夫」

と、縄の結び目に触れた。

「だめ！ そのまままでいいの。ああ、島で相手した病人と同じになつちやつた」

姉は咄嗟に縄から手を離し、目を丸くする。

「え、何のこと？ いつもと変わりない美久じやないの？」

「体から心が離れてるの。こんなことは、これまでになかつたわ。お姉さん、苦しいの」

「あの青江とかいう軍師のことね。城内での出来事聞いたわ。殺されそうになつた時の毒がまだ残つてゐるのね。医者を呼ぶわ。」

「違うの。ああ、胸が焼け付しそう。あの人の苦しみや悲しみが伝わるの。姉さん、私はどうなるの？」

「ああ、もしや北山の王子様のことなの。私も賢龍様にあの屋敷から助け出してもらつたわ。美久は彼のことを愛しているのね」

「……」

閉じられた北の窓、光がその隙間から漏れ出ていた。

「ああ、今、北山は連合軍から攻撃されている。あの大君と中山本陣が加わつたら勝ち目ないわ。賢龍様は、きっと殺されてしまう」

美久の心の目には、賢龍の戦いの様子が映り、涙がこぼれた。

敵軍の弓矢隊が、攻略した第一の城壁の内側から、本丸へ向けて弓矢を放つ。しかし、強風に、押し戻され、途中、落ちて行く。

しばらくそれが続くと、矢は届かぬ安全だ、と判断したのか本丸の戸が開かれた。

将兵等が下の様子を見ようと顔を出す。その時、別の弓矢が一斉に放たれた。光の帯の様に、細く白い矢であつた。それらは、本丸に一齊に突き刺さる。

青江の率いる別の弓矢隊の矢は、素材を変えて軽くし、羽をも小さくしていた。それを特別に百本ほど揃えたのである。

青江の奇策であつた。彼女は、中山の本陣が到着前に自分達だけで勝利して、尚巴志と大君に気に入られようと、知恵を絞つたのである。

二本の矢がハンアンチ王の胸に突き刺さり、その場に倒れた。

「父上！」

賢龍は駆け寄り王を抱きかかえた。そして大声で父の名を叫んだ。

「賢龍よ。北山を頼む」「何をおつしやるのですか。お氣を確かに、父上」

王は最高位を表す王の帽子を最後の力で威厳を持って、賢龍に被せた。

そして、手にもつ長刀を渡した。

「我が城の宝じや。北山の民を守れ」

これまで賢龍が旅に出るときに追従していた刀は代々、城の主の持つ秘宝だった。王位継承の証として正式に賢龍に譲

ろうとしていた。

賢龍は、右手に長刀を受け取り、

「父上、確かに受け取りました。北山を守ってみせます」

「さすがだ、賢龍よ。頼もしいぞ」

「父上！」

ハンアンチ王は、安心した顔で静かに息を引き取った。

「我々の神は、何故父の命を取らせた！」

彼は悲しみのあまり、城の守り神として置かれた石に向かって刀で切りつけ、轟音と共に中心部までも刺しねいた。

ハンアンチ王の最後であった。

二人を取り囲む将兵等に、さらに多くの矢が降ってくる。それを受けた兵らは倒れ、血が飛び散る。そこは、夜、月明かりの下で二人が愛を誓い合つた場所だった。

本丸の全ての戸板が再び閉じられた。

だが、既に矢の雨により血で染まつた地獄模様に変わつていた。その中を、賢龍は左足を引きずりながら反対側、南の城壁に近寄り王の帽子をかぶつたまま、南の方角、遙か遠くに目を向けた。

刀を右手に、

「美久！ 今、私が王となつた。こつちへこい、お前が必要なのだ。二人で城を、そして北山を守るのだ。美久！」

本丸に立つ若き王の姿を、下の南に待機していた敵軍が確認し、弓矢の集中豪雨を降らせてきた。

「いやーっ」

その光景が目に浮かぶや、真上を見て悲鳴を上げた。

「美久、どうしたら、あなたを助けられるの」

姉は美久の頬に触れる。

「お姉さん、私は賢龍様と心がつながつていています。私は呼ばれているの、『こっちにこい』って。でも私は中山の軍師。どうしたらしいの、分かららない」

美久は唇を噛んだ。すぐに血が滲み、下唇が歯で切り裂かれようとしている。

「美久！」

とつさに姉は美久の口に指を入れ、手ぬぐいを突っ込んだ。

「何てことするの……想う気持ちで体が焼き尽くされようとしているのね」

口に布を押し込まれたまま、もがき苦しむ美久の姿があつた。

息遣いが荒々しくなり、目がもはや人間のものとは思えないほどに血走り、見開いている。両足は激しく真下を打ち付け、床を太鼓のように響かせている。

そして力なく、うなだれた。

静かになつたかと思えば、急にハツと、目を見開いては大きく肩で息をする。

姉の頬を大粒の涙が一粒、伝つて落ちてゆく。

ゆつくりと美久の繩を解いて、口に入つた手拭いを取り出した。

「お姉さん……」

「心のままに生きなさい。これも、あなたの運命よ。思いを抑えようと思つても無理。後悔のないように……お父さんも

そんなこと言つて中山の兵となつたわ。そして戦い、死んでいった」

「ご免なさい。わかつてゐるけど、今、私は必要とされてい

るのよ！ 賢龍様を愛してゐるの」

「美久、あなたまで、失いたくない……あなたは、今度はお父さんを殺した北山側に行くのよ。敵同士になるの……もう二度と会えないかもしれない。本当に北山王子はあなたを愛してくれているの？」

美久はゆつくりと、頷いた。

「彼を想う心は押さえ切れないわ。それに彼は『愛してゐる』つて言つてくれるの……あの箱、昨日の夜、私に贈られてきたの」

美久は、後方に置かれた箱を開く。

中には丹念に折りたたまれた美しい着物があつた。

大和の布で織られ、明国風な鳥が飛び立つ刺繡の入つた着物だった。

美久はその着物を羽織つて姉に見せた。

「素敵。心が自由なのが美久よ。自分の気持ちに素直で、それがお父さんとそつくりなの。後のは心配しないで、幸せになつてね」

美久に笑顔が戻った。

「私、北山の王妃なのよ、信じられる？」

真夜中、美久は賢龍から贈られた着物を身につけ、北に向かつて馬で駆け出した。

賢龍の指示で、密偵は浦添の養成所の近くに馬を隠し、美久が自ら出て来るのを待つていたのである。

馬は黒装束のその者が上手に扱つた。北の空の雲が薄赤くなり、真下の炎の存在を知らしめていた。

その馬は北山を目前にして、鼻先を西の本部平原の屋敷へと行く先を変えた。

「美久様、そちらは今帰仁城の方向ではありませんが」

美久は、馬を止めるよう指示した。

「わかっています。あなたにお願いがあります。このまま

本部殿の屋敷へ、私の使いとして向かっていただきたい。きっと北山の力になります」

密偵は、しばらく躊躇していたが、美久の命令を受諾することにした。

そして、屋敷の目前で馬を降りた。

美久は、黒装束が壁を登つて行くのを確認すると、自分で馬を操り再び北山へと向かった。

やがて、青江率いる連合軍の野営陣地が見えてきた。美久は、馬から下りて急ぎ足で進む。

遠くには城門に火がつき燃え盛っている今帰仁城が見えた。

城の裏に近づいて、わざと北山軍の捕虜となつた。

「私は、美久です。門番の長に伝えてください。」

直ぐに、木々で隠された門が開場した。

石段の坂を登り進む城内 惨状を目にする。

傷を負つた兵士らが行き交う通路。美久は、その惨状から目をそむけながら通り過ぎ、城の最上部、本丸まで息を切らしながら上がつていった。

「美久！」

彼女を見るなり、大声を出し近寄る賢龍。周りの目も気に

せず抱きしめた。

「必ず中山を出ると、信じていた。父が亡くなり、私がこの城の主となつた。君は……」

「大事にしてください。私には、もうあなたしかいないの」

美久は賢龍の胸で泣き始めた。そして力が抜け、そのまま床に座り込みそうになつた。彼は、そんな美久を力強く抱きしめて支え続けた。

幸せを獲得し愛に満ち溢れ、喜びの声は小さいながら多くの兵の心に共鳴しあつた。

賢龍は生き残つた将兵らを集めて会議を開いた。

「この者が王妃だ」

「美久といいます。よろしくお願ひします」

と、彼女は満面の笑みを浮かべ、活き活きと挨拶をした。体全体から、喜びと希望があふれ出している。彼女の魅力

はその場に居合わせた兵士等を虜にし、戦場に置かれているのを忘れさせるほどだった。

「おお、お美しい。殿が先日、特注した大和着に明国模様の着物がお似合いじや。それに、目が生き生きとしていらっしゃいます。王妃として、申し分ありません」

老兵は目に涙を浮かべならそう話す。

小柄な武士、潮平が付け加えた。

「久高島で、我が王の右足を切らずに済んだあの時。そして

首里の毒薬の件まで、私はよく知っています。それにしてもあの時は、中山の女軍師にややもすると毒殺される所でしたね。いやあ、危なかつた」

「私も、あなたを覚えて、います。潮平殿。島ではいつも村長

と一緒に『たいへんだ、大変だ』って、一番後ろから走っていたわ。そんな村長にあなたは、賢龍殿が海蛇に噛まれたとき『王子の足を切り落とせ』といわれ、腰を抜かしていたんじやなかつたかしら」

と、美久に言い返され、気まずそうに彼は周りを見渡す。

賢龍は、ゾクツとして自分の右足に触れて、その感触を確認しては手を引いた。

その様子を見た美久は微笑んだ。

潮平は調子に乗って、

「いやはや、実は、美久様の夜逃げの件も知っています……

僕も、ああ、夜逃げしたいなー」

他の武士がすかさず、

「あの世に？」

居合させた兵士等に、久しぶりに笑い声が響いた。

美久は優しく、

「潮平殿は、いい男ですよ。彼女をどこからか、夜逃げさせ

る程に」

それを聞いた潮平は、胸に手を当てて、美久に乞う瞳を向ける。

「嫌、私以外を探してよ」

と、美久は困った顔をした。

居合わせた将兵等に、笑いが広がつた。

美久に、全ての将兵の視線が集まつていた。

賢龍はそれに気が付き、彼らに向かって、

「我が軍の最高軍師である。美久の命令は、私の命令じゃ」

「北山のためにお役に立ちたいと思います」

鎧を着けた武士、二十人程が揃つて美久に頭を下げ敬礼した。

その仕草が伝わり、城を守る全ての兵士は本丸に向かって座して頭を下げる。

老女が、付き添いと共に、ゆっくりと賢龍に近寄る。

「お婆、何故、城の中に居るのですか？」

祖母は杖を掴む手に力を入れ、

「風が伝えてきたのじや。わしや、後先短い。冥土の土産に、おもしろいものを見せてくれるとな。降伏して、自害させられる孫と嫁の姿は見たくないぞ」

賢龍と美久は祖母の前で黙した。祖母は声を荒げて、

「悲しくも治める者の運命じや。愛の炎で城を焼き尽くしてもいいぞ」

美久は、右手で自分の顔を隠し、

「まあ、恥ずかしい」

はにかみながら賢龍に寄り添い、彼の腕を強く抱きしめた。

賢龍は、受け入れるかのように無言で優しい。

湧き出る彼の逞しさが、美久の心に安らぎを与え、幸せな気持ちにさせていた

老将兵の目には涙があふれ、進るよう両手を広げた。

「今日は、なんて素晴らしい日なのだろう。この城に、愛が注いでいる」

つづく